

貝原益軒著・松田道雄訳「大和俗訓・和俗童子訓」中公文庫、中央公論社 1973年12月25日刊を読む

和俗童子訓

—読書法—

1. 書を読むには

- (1) およそ書を読むにはまず手を洗い、心を慎み、姿を正しくし、机のほこりをはらい、書物を正しく机の上においてすわって読むがよい。
- (2) 先生に本を読むのを習う時は、高い机の上においてはならない。帙の上か、あるいは文匣(紙で下張りをし、その上に漆を塗って作った手箱)、ひくい机の上のせて読まないといけな^{ちつ}い。け^{ぶんこう}っして人のふむ席の上においてはいけな^{ちつ}い。本をよごしてはいけな^{ぶんこう}い。
- (3) 本を読み終ったならば、もとのようにおおいをかけてしまっておく。もし急なことがあって立ち去る場合でも、かならずしまわないといけな^{ちつ}い。また本を投げたり、本の上をまたいだりしてはいけな^{ぶんこう}い。本を枕にしてはいけな^{ちつ}い。本のページの端を巻いておりかえしてはいけな^{ぶんこう}い。つばをつけてページをめくってはいけな^{ちつ}い。
- (4) 古い紙に経伝の言葉や、聖賢の名が書いてあったら敬意を表して、ほかのことに使ってはいけな^{ちつ}い。また、主君や父母の姓名のある古い紙をよごしてはいけな^{ぶんこう}い。

2. はじめて本を読むには

- (1) 子どもの記憶をおしはかって、七歳から上に学問をさせる。
- (2) はじめは朝早く本を読ませ、食後には読ませない。
- (3) その心を苦しめてはいけな^{ちつ}い。
- (4) 半歳たったら食後にもまた読ませるがよい。

3. ゆっくり声をだして

- (1) およそ本を読むときはいそがしように早く読んではいけな^{ちつ}い。ゆ^{ぶんこう}っくりと読んで一字一字、一句一句はつきりさせないといけな^{ちつ}い。一字も誤ってはならぬ。かならず心^{ちつ}到・目^{ぶんこう}到・口^{ちつ}到と^{ぶんこう}いうようにしないといけな^{ちつ}い。この三^{ちつ}到のうち心^{ぶんこう}到をさきにする。心^{ちつ}がここになかったならば、見ても見えず、心^{ぶんこう}が到らずしてむやみに口^{ちつ}で読んでも覚えな^{ぶんこう}い。また急に無理に暗記させても時^{ちつ}がたてば忘^{ぶんこう}れてしまう。
- (2) ただ心をこめて多く何べんも音読すると、自然に覚えてながく忘れな^{ちつ}い。回数をかぞえて熟^{ぶんこう}読するがよい。
- (3) 一つの本をすっかり読んでから、また別の本を読むがよい。聖人の書や、賢者の伝などの有益な本のほかに雑書を見てはいけな^{ちつ}い。
- (4) 心を正しくし、行儀を慎んで、みだりにしゃべらず、笑わず、みだりに外に出入りせず、みだりに動作せず、志を学問に専一にしないといけな^{ちつ}い。つねに時間を惜しんで、用もないのに無駄に時間をついやしてはならない。

4. すこしずつ教える

- (1) 子どもに学問を教えるのはあまり再々やっではいけな^{ちつ}い。何度も文句が多くむずかしいことを教えると、学問を苦しんでいやがる心が出てくることがある。

- (2)だから簡要をえらんで回数を少なく教えるがよい。少しずつ教え、読み習うことをきらわな
いで、好きになるように教えるがよい。
- (3)むずかしく面倒で、その気を屈するようなことをしてはならない。日々の勉強の課程をちよ
うどよい短さにきめて、毎日怠りなくすすめるがよい。
- (4)およそ子どもを教えるのには、かならず先生がないといけない。もしほかに先生がなかった
ならば、その父兄がみずから日々の課程を定めて読ませるのがよい。父兄が骨折らないと教え
は行なわれない。

5. 教えるには順序を

- (1)はじめて本を読む時には、まず文句が短くて読みやすく覚えやすいことを教えるがよい。
- (2)はじめから文句の長いことを教えると退屈しやすい。
- (3)やすいことをさきにして、むづかしいことをあとにするがよい。

6. さきを急がないで

- (1)およそ本を読むには早くさきを読んではいけない。
- (2)毎日復習をして読むことをもっぱら努力させ、復習を数十べんし終ってから、そのさきを読
むのがよい。そうでなく、ただ早く進むことを好んで復習が少ないと、きっと忘れて、自習し
た効果も先生の教えた効果もなくなり、ひろく何十冊の本を読んでも役に立たない。
- (3)一巻でもよく覚えれば、学力となって効果がある。かならずよく覚えなといけない。本を
読んでも学問がすすまないのは、熟読しないで覚えなからである。
- (4)才能があれば八歳から十四歳まで七年の間に、「小学」・四書五経などみな読み終える。四
書五経を熟読すると、才力が出てきて学問の根本ができる。その力をもって、だんだん大き
くなってから、いろいろの本を見るがよい。

7. きらいにならぬように

- (1)子どもにはじめて本を教えるときは文句を長く教えてはいけない。一句二句ずつ教える。ま
た一度にたくさん教えてはいけない。多いと覚えられないし、覚えてもあやふやである。その
ういやがって勉強がきらいになる。かならず退屈させないように少しずつ教えるがよい。
- (2)その教え方は、はじめはただ一字二字三字ずつ字を知らせるがよい。そのあと一句ずつ教
えるがよい。すでに字を知り句を覚えたならば、子どもに自分で読ませるがよい。
- (3)二つの句を教えるには、まず一句を読み覚えさせ、熟読したならば、つぎの句をまた同じよ
うにして読ませ、熟読して、前の句とあとの句とを通読させてからやめるがよい。
- (4)数日間このようにして、また、一、二句ずつだんだんに教えて行くがよい。教えて行くうち
に、ようやく字が多くなってきたら、分けて二、三回にして読ませ、その二、三回のそれぞれ
を熟読させて、合わせて通読させる。もし、その中で覚えにくい所があったら、そこばかりま
た数回読ませる。またたいへん読みやすいところを、わけて読ませるときは師は読まないほう
がよい。これは仕事をはぶく方法である。

8. 句読をはっきり

本を読むときはかならず句読くとうをはっきりさせ、発声を嚴重にし、清濁を区別し、訓点に間違い
がないようにし、「てには」を正確にしないとけない。世俗の不注意な誤りに従ってはいけない。

9. 繰り返して

- (1)本を読むのに、以前にほぼ熟読し覚えたところでも、長く読まないと忘れるにきまっている。

- (2)だから本を読み終ったあとに、すでに読んだ本をときどき繰り返して読むがよい。
- (3)また毎日三、四、五回、以前に教えられたところを、今日習うところに続けて読むのがよい。こうすれば忘れない。

10. 日々怠らず

- (1)毎日一つの善いことを知り、一つの善い事を行なって、小をつみ重ねていけばかならず大にいたる。日々の仕事を怠ってぬかしてはいけない。
- (2)はじめは毎日、「日記故事」（初歩教育用の故事集）・「蒙求」の故事などの善い言葉、善い行ないを一つ二つ書きとめておくのがよい。毎日、数項目のうち二、三条を書いておくがよい。一日に一条書いておけば、一年には三六〇条になる。
- (3)詩歌を読み覚えるのもこの方法でやる。一日に一首覚えれば、一年に三六〇首である。
- (4)毎日声をあげて読んで日々怠ってはならない。長い間つみ重ねていくとその効果は大きい。

11. 学而篇を

- (1)子どもにはじめて本を教える時には、文句が短く、文章の意味がわかりやすく、はっきりとよく聞こえるように教えないといけない。子どもに相応しない、高く、深く、まわり遠く、むずかしく、わかりにくいことを教えてはいけない。
- (2)また言葉を多く長くしてはいけない。言葉を少なくしてきとしやすくしないといけない。まず、「孝経」の首章、「論語」の学而篇を早く教えるのがよい。これが根本を勉強させる方法である。
- (3)小学の書を説明する時は、義理を浅く軽く説くがよい。深く重く説いてはならない。これが子どもに教える方法である。

12. 文章の意味を

- (1)子どもの読書では早くから文章の意味をところどころ教えたほうがよい。
- (2)「孝経」でいうと仲尼とは孔子の字である。字とはおとなになってからつけるかえ名である。子は先生のことをいう。曾子は孔子の弟子である。参は曾子の名である。先王とは昔の聖王のことである。不敏とは鈍なことである。
- (3)また「論語」の首章を読むときは、学ぶとは学問をすることである。習うとは学んだことを身に勤めて習うことである。説ぶとはおもしろいという意味である。楽しみとは大いにおもしろいという意味である。
- (4)というふうに、読書のついでに文章の意味を教えると自然に書がわかるようになるものである。

13. 時間を惜しんで

- (1)古い言葉に「光陰箭の如く、時節流るるが如し」とか「光陰惜しむべし。是を流水にたとう」とかある。月日のたつのは年々早くなるものである。一度過ぎてしまうと帰ってこないことは流水のようなものである。今年の今日の今は二度と帰ってこない。何もせずに、なまけて日を送ることはからだを無駄にすることである。惜しむべきことだ。
- (2)大禹は聖人であったのに、なお寸陰を惜しまれた。まして末世の凡人はさらに時を大事にしなければならぬ。聖人は一尺の宝玉を尊ばないで、一寸の光陰を惜しむともいう。
- (3)少年の時は物覚えがよくて、中年以後になって数日かかることを、ただ一日、半日で覚えて死ぬまで忘れない。一生の宝となる。年をとってから後悔しないように子どもの時に時間を惜しんで努力しないとはいけない。こうすれば後悔がないだろう。

14. 学問の要訣は

- (1)本を読み、学問をする法は、年が若くて記憶の強い時、四書五経をつねに熟読し、回数を何べんも重ねて暗記し、音読するがよい。
- (2)子どもの時にかぎらず老年になっても、つねに繰り返して読むがよい。これは義理の学問の根本となるばかりでなく、文章を学ぶ手本となる。
- (3)つぎに「左伝」を数十回読むがよい。はなはだ有益である。
- (4)これは学問の要訣である。知らないといけない。

15. とりわけ「孟子」を

- (1)子どもの時に、経書のうちでとりわけ「孟子」をよく熟読し、声を出して読むがよい。
- (2)これは義理の学問のためになるばかりでなく、文章をつくるもとになる。この書は文章の手本となり、筆力を助ける。朱子も「孟子」を何度も音読して文章の規則をさとったといっている。
- (3)文章をつくるためには、「礼記」のなかの檀弓篇、「周礼」のなかの考工記を何度も音読しないといけない。これらはみな古人のいっているところである。
- (4)また漢文のうち数篇、韓、柳・欧・蘇・曾南豊等の文章のなかで心になかったものをえらんで三十篇をよく音読し、そらで書いて忘れないようにするがよい。作文を学ぶにはかならずこうするがよい。

16. 毎日四書を

- (1)四書を毎日百字ずつ百ぺん音読して、そらで読んで、そらで書くがよい。文字のおきどころ、助字のありどころがどこにあったか間違わず覚えて読むがよい。これほどのことは年とってからも勉強すればできることである。まして少年は物覚えがよいのだから、ぜひやらないといけない。
- (2)四書をそらで覚えてしまうと、その力で義理に通じ、いろいろの本を読むことが容易になるだろう。また文章のつづきや文字のおきかたや助字のあり場所もよく覚えてしまうと文章を書くのにも助けとなろう。こうして四書を習って覚えてしまえば、初学の勤めは大半は成功したといえる。
- (3)「論語」は一万二七〇〇字、「孟子」は三万四六八五字、「大学」は経伝を合わせて一八五一字、「中庸」は三五六八字あり、四書全部合わせて五万二八〇四字である。一日に百字を読んで暗記すると日数は五二八日で終る。これは千七ヵ月と十八日であるから一年半にならないうちにできあがってしまう。早く思いたってこうするがよい。これにまさった学問のよい法はない。勉強法は容易で効果ははなはだ大きい。
- (4)私などは若い時にこのよい方法を知らないで、むなしくすぎ、いま八十になって年功でようやく勉強の道筋が少しわかってきた程度で、いまさらたいへん後悔している。また「尚書」のうちで純粋な数篇、「詩経」「周易」の全文、「礼記」九万九〇〇〇字のうち、その大事な文字をえらんでみると三万字、「左伝」のもっとも重要な文章は数万字ある。これもまた日課を定めて、何べんも何べんも熟読すると、学問においてはおそらく世に類のない人になるだろう。これは学問のよい方法である。

17. 経書のつぎは史書を

- (1)史はむかしのことを書いた文章である。記録のことである。史書はむかしあったことを考えて今日の手本とすることであるから、これまた経について読まないといけない。経書を学ぶひまに日本や中国の歴史を読んで、古今に通じるがよい。古書に通じないものは、知識が浅くて

役にたたない。

- (2)日本の歴史は、「日本書紀」以下六国史より近代の野史(民間の人がつくった歴史)にいたるがよい。野史もまたたいへん多いからいろいろ見ないといけない。
- (3)中国の歴史は「左伝」「史記」「漢書」以下であろう、朱子の「通鑑綱目」の書は歴代を貫いて、世の中がどういうものであるかを教え、天下万世に役にたつ。経伝のほかこれに過ぎる好書はない。この本一冊のなかに、昔のことに通じ、善悪をわきまえ、天下国家を治める道理がすべて明らかになっている。まことに世の宝である。道を学ぶ者は好んでこれを読まないといけない。ことに国家を治める人の鑑^{かがみ}である。また、「通鑑」前編・続編も見るがよい。前編は伏羲^{ふつぎ}より周まで、朱子の「綱目」以前のことが書いてある。続編は宋・元のこと書いてある。朱子の「綱目」以後のことである。これに続いて、「皇明通記」「皇明実記」などを見れば、古今に通じることができる。

18. あとのことを考えて

- (1)子どもの時から学問の時間を惜しみ、無駄な遊びをしてはいけない。手習をし、書を読み、芸を学ぶことを遊びと考えるがよい。こういう勉強ははじめはおもしろくないけれども、だんだんと習慣になると、あとはなぐさみになって、煩わしくなくなる。およそ万事時間を使ってできるものであるから、時間ほどの宝はない。これは士・農・工・商を通じて同じである。これほど惜しい大切な時間をむなしく過ごし、また役にたたないことをし、ならず者の小人と交わって時間を惜しまないで、何もせず月日を送る人は、しまいには才知もなく、芸能もなく何事も人に及ばず、人にいやしめられるものである。
- (2)少年の時は、気力も記憶も強いから、時間を惜しんで本を読んでおくがよい。こうすれば、死ぬまで忘れず一生一代の宝となる。年が大きくなってしまうと仕事が多く、時間もなく気力もへり記憶も弱くなるから、学問に苦勞しても効果が少ない。少年の時にこのわけをよく知って時間を惜しんで勉強するがよい。若い時に怠って、年とってから後悔してはならない。
- (3)このことは前にもすでにいったが、老人のくせで、同じことを繰り返すのは、聞いている人からはいとわしいだろうが、年の若い人によく心得させようと思つていうのである。およそのちのためによいことをもつぱら勉強するがよい。はじめに勉強しないとあとから楽しみがない。あとから後悔しないように考えてしないといけない。はじめに慎まないで怠っていると、かならずあとで悔やまねばならぬ。

19. 文字を覚える

- (1)子供が本を読む時には、文字を多く覚えないと読書力がなくて学問が進まない。
- (2)また文字を知らないと、すべて世間のことに通じない。芸などを習うにも、文字を知らないと、そのわけがわからず間違っただけが多い。
- (3)文字を知れば、またその文章のわけを心にかけていろいろなことがわかってくるだろう。

P249 ~ 259

<コメント>

江戸時代に最もよく読まれた教育書が、貝原益軒著の「大和俗訓」と「和俗童子訓」の2冊。ここに紹介した「和俗童子訓」は、現在の小学生・中学生にあたる年代の青少年に対する教育のあり方を具体的に示したものだ。松田道雄先生の現代語訳が素晴らしいので、理解が進み有難く思う。是非、全文をお読みください。

2021年10月20日(水) 林明夫